2022.03.06 七里教会　　最上光宏

「共におられる主」　　ヨハネによる福音書 14:15-31

先週の水曜日から主イエス・キリストの苦難と死を偲ぶ「受難節」に入りました。イエスさまは、いよいよ今夜捕らえられ、明日には十字架にかけられるという最後の夜、弟子たちと「最後の晩餐」をされました。ヨハネ福音書によると、イエスさまはその席で弟子たちの足を洗われ、最後のお別れの説教をされました。そのいわゆる「訣別説教」が、先週学んだ 14 章から 16 章にかけて記されているのです。

そのイエスさまのお別れの説教は、「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」(14:1)という言葉で始まっています。弟子たちは、イエスさまとの別れの時が来たことを察して、不安と恐れの思いにとらわれたのです。そのような弟子たちに、イエスさまは「心を騒がせるな」と、たしなめながら、ご自分の十字架の死の意味と、後に遺される弟子たちのために、慰めと励ましの言葉を語られたのです。

まず、イエスさまがこのお別れの言葉で語られたことは、「わたしはあなた方のために場所を用意しに行く」ということでした。弟子たちが、神さまのみもとに居場所を得るために、一旦父のもとに帰るが、場所の用意が出来たらまた戻って来て、あなたがたを迎える、と言われたのです。これは、イエスさまの十字架の死と復活が、弟子たちのためのものであり、弟子たちが、イエスさまと共に神の国にあずかるために通らなければならない道であることを示されたのです。先週学びましたように、イエスさまはそのことを「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことが出来ない」(6 節)という言葉で語られたのです。

それに続いてイエスさまが語られた言葉が、今日の 15 節以下です。ここには**「聖霊を与える約束」**という見出しが付けられていますように、イエスさまが死んで復活され天に帰られた後、弟子たちに聖霊が与えられる、という約束が述べられているのです。

16 節にこう記されています。**「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。この方は真理の霊である」**と。この「弁護者」という言葉は、下の段の 26 節にも記されていますが、「聖霊」を意味するヨハネ福音書独特の言葉で、ギリシャ語の「パラクレートス」という言葉が使われています。この言葉は「側に呼んでくれるもの」という意味で、「助け主」とか「慰め主」とも訳される言葉です。

人はだれでも、みんなから見放され見捨てられるような孤独には耐えられません。いまコロナ禍の中で医療がひっ迫し、自宅で待機せざるを得ない患者さんが増えているようですが、高熱で呼吸困難なときに、そばに誰もいない。声を掛けてくれる人もいなければ、人を呼ぶことも出来ないという状態は、どんなに不安で寂しいことだろうかと思います。

現にそのような状態に置かれている高齢者が多いようです。そういう所に、訪問医や介護の人が訪ねて来てくれて、一命を取り留めたというニュースを聞くと、ほんとうに慰められます。また今、ウクライナの人たちが、ロシア軍の侵攻によって家族ばらばらになって隣国のポーランドなどに避難している様子をテレビで見るにつけ、ほんとうに心が痛みます。爆撃などで子どもを失った母親や、親を亡くした子どもたちの悲しんでいる姿に、改めて戦争の悲惨さを思わされます。そういう悲しみと孤独の淵に立たされた時、私たちを慰め助けるのは、そばにいて、私たちの悲しみ苦しみを受け止め、そっと声を掛けてくれる存在です。また私たちがあらぬ嫌疑を掛けられ人々から非難攻撃を受けたような時、自分の立場を弁護し、真実を明らかにしてくれる「弁護者」がいることは、どんなに励まされることでしょう。

「聖霊」を「パラクレートス」という「弁護者」や「助け主」「慰め主」を意味する言葉で言い表したことに、私はたいへん深い意味を感じます。わたしたちは、だれでも「側にいて、声を掛け受け入れてくれる助け手(弁護者)」を必要としているのです。

イエスさまは、弟子たちとの別れに際して、「弁護者」としての聖霊をあなたがたに遣わすよう、父にお願いして永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてもらおうと言われたのです。さらにイエスさまは、17 節で**「この方は真理の霊である」**と言い、**「世はこの霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることが出来ない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである」**と述べられました。

「聖霊」は見えざる神の力です。「神の息」とも言われます。この聖霊は、信仰をもたない世の人々には、理解出ない存在であっても、イエス・キリストを信じる者にとっては、身近な存在であり、常に私たちの内に、私たちと共にある存在だというのです。

私は若いころ、「聖霊」がよく分かりませんでした。なにか霊的な興奮状態か、陶酔したような体験をしなければ得られない特殊なものとして考えていたために、自分のような冷めた人間には理解できないものだ、と思っていました。私は当時、「聖霊」の存在よりも「悪霊」の力に、より身近さを感じていました。神さまのみ心に従い、清く正しく生きようとしても、どうしても誘惑に負けて、神さまのみ心に沿わないことをしてしまう。そういう自分の弱さの中に、悪魔的な力が働いているように感じたからです。しかし、そういう自分が本心に立ち帰り、神さまの前に自分の過ちや罪を悔い改めて祈った時、聖霊が私を導いてくださり、立ち帰らせてくれたのだということに気付かされました。そういう体験を通して、神さまのことを思い起し、神さまのみ心に従おうという思いを与えてくれるものが、聖霊の働きなのだと、理解することが出来るようになりました。

パウロは、コリントの信徒への手紙の中で「聖霊によらなければだれも『イエスは主である』とは言えないのです」(12:3)と語っています。イエスさまを「主」と告白すること自体が「聖霊」の導きによるのです。目に見えない神を信じ、イエス・キリストを救い主

として受け入れること自体が、聖霊の働きによるものなのです。パウロはまたローマの信徒への手紙の中で、「わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、”霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」(8:26)とも述べています。祈れない私たちが、「天の父よ」と神さまに祈ること自体、「聖霊」の働きによるのです。

イエスさまは 18 節で、弟子たちにこう言われました。**「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻ってくる。しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる」**(18-19 節)。「あなたがたをみなしごにはしておかない」という言葉は、前の訳では「あなたがたを捨てて孤児にはしない」となっていました。「孤児」というと、私たちの年代は、かつての大戦で親を失った「戦争孤児」のことを思い起こします。あの戦争で、私と同世代の多くの人たちが、幼少時代、親を失い、家を失い、「孤児」として大変つらい悲しい思いを担わされました。イエスさまは、そういう孤児たちの孤独の悲しみと寂しさに思いを馳せながら、弟子たちには決してそのような辛い悲しい思いをはさせない。また「戻ってくる」と言われたのです。ここで、「戻ってくる」と言われたのは、単に死んだ後の復活ということだけではなく、天に昇って神さまのもとに帰られた後、「聖霊」として弟子たちの内に宿り、弟子たちと常に共にいるということです。「わたしはいつも、永遠にあなたたちと一緒だよ」というのです。イエスさまに見捨てられるような不安と寂しさの中にあった弟子たちにとって、この「孤児とはしない」というイエスさまの言葉はどんなに大きな慰めであり、励ましであったことでしょう。

このイエスさまの約束は、イエスさまが十字架で死なれて復活されてから、50 日目のペンテコステ(五旬祭)の日に、現実となったのです。使徒言行録 2 章にその時の様子が詳しく描かれています。弟子たちが共に集まり祈っている時、**「突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると一同は聖霊に満たされ、”霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した」**(2:2-4)。　聖書には、このように聖霊降臨の出来事が、大変不思議な現象として描かれていますが、この日弟子たちが体験したことは、聖霊によって、イエスさまが生前語られたことを新たに思い返し、十字架の死と復活の意味を深くとらえ直し、「イエスさまは今も生きて私たちと共におられる」という信仰の確信を与えられたことでした。風のような激しい音は、「神の息」神の霊の力強さを表わすものでしょう。また、炎のような舌とは、冷え切っていた弟子たちの心を熱く燃やす思いと、今まで人を怖れてうまく語れなかった弟子たちが自由に大胆に語れるようになったことを表す心象ではなかったかと思います。そのような内的な大きな変化が、聖霊によって与えられた、ということだと思います。いずれにしても、その弟子たちの確信に満ちた信仰の言葉が、諸外国から集まって来ていた人々の心に響き、多くの人が悔い改めて洗礼を受け、初めての「教会」が誕生したのです。

使徒言行録を見ると、福音書に描かれている弟子たちとは、全く別人のような、たくましく力強い弟子たちの働きが生き生きと描かれています。それは、「聖霊」が弟子たちの内に宿り、主イエス・キリストが常に共にいて働いてくださるという、信仰の確信によるものでした。それは、弟子たち自身の働きというよりも、弟子たちの内に働く聖霊の働きによるものでした。ですから「使徒言行録」は、「聖霊言行録」というべきだという人がいるくらいです。

教会は、この世にあって、ほんとうに小さな無力な群れです。しかし主の教会には、この世にはない豊かな賜物が与えられているのです。それが、聖霊の力です。パウロは欠け多き自らの限界と弱さを痛感しつつ、自らを「土の器」に譬えました。しかし、その「土の器の中に宝を納めている」と言い、その内なる宝のゆえに、「四方から苦しめられても行き詰らず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」(Ⅱコリント 4:7-9)と述べています。私たちキリスト者は、そのような存在なのです。聖霊によって主イエス・キリストが私たちの内に宿り、常に私たちと共におられるからです。

イエスさまは、27 節でこうも言われました。**「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」**

イエスさまはこの別れの言葉の冒頭で語られた「心を騒がせるな」(1 節)という言葉をここでもう一度繰り返しつつ、あなたがたに「わたしの平和を与える」と約束されました。これは「シャローム」という神による平和・平安を意味する言葉です。新たな戦争の危険の中で、心を騒がせ、おびえる私たちに、イエスさまは平和があるようにと、祈りつつ十字架に向かわれたのです。私たちは聖霊の助けを頂きつつ、主のみ心に適った平和が実現するように祈り、そのために出来ることを共に励み、主と共にある歩みを全うしたいものです。　　アーメン